

75 各種扁平上皮癌における血清SCC抗原測定 の臨床的意義

—特に経過観察における有用性について—
美濃直子, 飯尾篤, 阿多まり子, 宇都宮富代,
東野博, 山川順子, 片岡正明, 河村正,
浜本研(愛媛大 放)

血清SCC抗原は、子宮頸部扁平上皮癌においては、既にその臨床的有用性を評価されている。我々は、先に原発性肺癌において血清SCC抗原を測定し、本マーカーが肺の扁平上皮癌にも比較的特異性が高く、手術や放射線治療後には、腫瘍の縮小程度とよく関連して減少し、一方再発においては高値となることを見出し、血清SCC抗原は、スクリーニングに用いるのには限界があるものの、治療効果の判定や再発等の経過観察には、有用なマーカーであることを報告した。そこで今回は、食道および頭頸部における扁平上皮癌についても、血清SCC抗原を測定し肺癌においてと同様に、本マーカーの特異性、臨床病期や再発との関係、治療に伴う変化等について検討し、肺の扁平上皮癌で得られた結果と比較するとともに、本マーカーの臓器特異性についても考察を加えた。

76 肺癌患者の血清Neuron-Specific Enolase (NSE)測定の意義

中筋孝史, 田名原マサ子, 豊田敬子, 高田 実*,
北野 保, 福永義純, 宮川トシ
(大阪府立羽曳野病院RI科, 内科*)

肺癌患者の血清NSE値を測定し、その腫瘍マーカーとしての有効性を検討した。測定はNSE-栄研(RIA)を用い、正常健康人65例のmean±2SD(6.6ng/ml±3.4ng/ml)より10.1ng/ml以上を陽性とした。疾患別の平均値及び陽性率は、肺癌83例(39.8ng/ml, 61.4%)、その他の良性肺疾患22例(11.8ng/ml, 18.6%)であった。肺癌の各組織型別では扁平上皮癌11例(15.1ng/ml, 36.4%)、腺癌23例(10.5ng/ml, 17.4%)、小細胞癌49例(59.1ng/ml, 87.7%)であった。小細胞癌例の病期別血清NSEの平均値及び陽性率は、LD22例(23.9ng/ml, 72.7%)、ED27例(87.8ng/ml, 100%)とED例で高値、高率であった。小細胞癌例で治療前後の血清NSEの平均値の変化では、有効例13例で(26.7ng/ml→6.7ng/ml)、無効例9例で(42.6ng/ml→22.8ng/ml)と、有効例で有意に減少した。臨床的再発まで経時的に血清NSE値が測定された小細胞癌5例で全例再発に一致してNSE値の上昇を認め、うち2例はNSE値の上昇が再発に先行した。血清NSEの測定は肺小細胞癌の腫瘍マーカーとして有用であると考えた。

77 RIA PSTIの泌尿器科領域における測定 の意義

大石幸彦, 町田豊平, 上田正山, 木戸 晃,
田代和也, 和田鉄郎, 鳥居伸一郎, 吉越富久夫
(慈大 泌)

血中ヒト膀胱分泌性トリプシン・インヒビター(PSTI)は急性膀胱炎をはじめとする膀胱疾患、悪性腫瘍の一部、腎機能障害例で上昇し、その重症度や臨床経過を反映することが知られている。今回、泌尿器科各種悪性腫瘍例のPSTIを測定、検討した。

対象とした疾患は腎腫瘍18例、腎盂腫瘍5例、膀胱癌26例、前立腺癌17例、睪丸腫瘍5例の計71例である。

測定はPSTI TEST Shionogiを使用し、RIA法で行った。

腎腫瘍では18例中11例(53.6%)、腎盂腫瘍5例中4例(80%)、膀胱癌26例中7例(26.9%)、前立腺癌17例中10例(58.8%)、睪丸腫瘍5例中2例(40%)に17ng/ml以上の陽性値を認めた。陽性例のほとんどは病態の進行した症例や、転移を有する症例であった。

PSTIは従来腫瘍マーカーのないといわれる腎腫瘍、腎盂腫瘍や膀胱癌で腫瘍の再発の検索や病態の推移を知る上である程度価値が有ると思われる。

78 ヒト心房性Na_a利尿ポリペプチド(α-hANP) の測定

山本英明, 荒井孝, 高橋晃, 池井勝美, 橋本宏,
(埼玉小児 放)

太原博史, 望月弘, 赤司俊二, (同 腎)

α-hANPは、強力な利尿作用を有するポリペプチドとして注目されており、その基礎的研究にはめざましいものがある。α-hANPの測定は、初めは検体の抽出を要し複雑なものであったが、最近では容易な測定キットが開発され、ルチンへの導入も可能になった。

われわれは、α-hANPキット(栄研ICL)の添加回収率試験、希釈試験、再現性などの項目について検討を行い、その品質を確認した結果、問題のない組み合わせであった。臨床応用として、種々の生理的な因子で変動する正常値の条件について検討した。つづいて、小児の末期腎不全およびネフローゼ症候群に於けるα-hANPの動態について検討した。その結果α-hANPは、続発性の浮腫や体液量の増加を伴う病態で高値を示し、減少する病態で低値を示したことから、体液量の変化を評価する指標として有用であった。